

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	山本 真也
2. 審査委員	主査：（兵庫教育大学教授） 井澤 信三 副主査：（兵庫教育大学教授） 宇野 宏幸 委員：（兵庫教育大学教授） 松本 剛 委員：（岡山大学 教授） 大竹 喜久 委員：（上越教育大学教授） 村中 智彦
3. 論文題目	Experimental Examination on the effectiveness procedure to teach social niceties in the workplace for individuals with autism spectrum disorder 自閉症スペクトラム障害者に就労に関するソーシャルニシティを教えるための有効な手続きに関する実験的研究
4. 審査結果の要旨	<p>論文提出による学位申請者 山本真也 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和2年7月18日（土） 13時00分～15時00分 場所：兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス講義室4</p> <p>1. 学位論文の構成と概要 本論文は、以下に示す7章から構成された。 第1章 はじめに (Introduction) 第2章 研究1：行動的スキル訓練の有効性の検討 (The examination of the efficacy of behavioral skills training) 第3章 研究2：文字プロンプトの有効性の検討 (The examination of the efficacy of textual prompt) 第4章 研究3：文字プロンプトとパフォーマンスフィードバックの有効性の検討 (The examination of the efficacy of textual prompt and performance feedback) 第5章 研究4：写真付き文字プロンプトの有効性の検討 (The examination of the efficacy of textual plus photo prompt) 第6章 研究5：文字プロンプトとパフォーマンスフィードバックの有効性の比較 (The comparison of the efficacy of textual prompt and performance feedback) 第7章 総合考察 (General Discussion)</p> <p>各章の概要は以下に示すとおりである。</p>

第1章では、自閉症スペクトラム障害者における職場適応と必要なスキル訓練に関する先行研究がレビューされている。自閉症スペクトラム障害者のソーシャルスキルの獲得と般化の困難性は従来から指摘されているが、行動的スキル訓練の工夫により獲得と般化促進は可能であることも指摘されている。さらに、ソーシャルスキルの中のソーシャルナイスティの獲得と般化は、通常のソーシャルスキルよりも、一層困難であることが示されている。ソーシャルナイスティとは、より丁寧かつ礼儀正しさなどを意味するソーシャルスキルである。たとえば、「失礼します」「今、お時間、よろしいですか」「ありがとうございます」といったスキルである。

一方で、これまでの先行研究より、自閉症スペクトラム障害者がソーシャルナイスティを獲得することが就職及び就労定着に良好な影響を及ぼすことが示唆されている。また、ソーシャルナイスティの獲得において、文字プロンプト、パフォーマンスフィードバック、行動的スキル訓練が有効な手続きとなり得ることも示唆されている。

本論文では、般化促進のために職場を模したシミュレーション場面をベースにし、行動的スキル訓練、及び文字プロンプトとパフォーマンスフィードバックの効果、組合せ、比較の検討により、より効果的かつ効率的な指導パッケージについて明らかにすることを目的とする。

なお、本研究は基本的に複数名の自閉症スペクトラム障害者を対象として実験的な研究（主にシングルケース実験デザインを適用）であり、研究毎に参加者は異なっていた。参加者は、年齢幅としては15～25歳（平均20歳）、全て知的障害を伴わない自閉症スペクトラム障害のある高校生、大学生、または就労移行支援事業等を利用していた社会人であった。

第2章（研究1）では、自閉症スペクトラム障害者（参加者4名）のソーシャルナイスティの獲得に対する行動的スキル訓練の効果を検討した。結果として、シミュレーション訓練と行動的スキル訓練の組合せはソーシャルナイスティの獲得に有効であったことが示された。

第3章（研究2）では、自閉症スペクトラム障害者（参加者5名）のソーシャルナイスティの獲得に対する文字プロンプトの効果を検討した。結果として、文字プロンプトの導入は全参加者5名中の3名のソーシャルナイスティの獲得に有効であった。しかし、残る2名のソーシャルナイスティの獲得は十分ではなく、課題が残った。

第4章（研究3）では、自閉症スペクトラム障害者（参加者9名）のソーシャルナイスティの獲得に対する文字プロンプトとパフォーマンスフィードバックの組合せの効果を検討した。結果として、全ての対象者に有効性が認められた。しかし、研究3の参加者は文字プロンプトで提示した通りに行動できる者のみであった。そのため、より多様な対象者に対して有効な手続きの開発が今後の課題とされた。

第5章（研究4）では、文字プロンプトだけでは、ソーシャルナイスティの獲得に至らない自閉症スペクトラム障害者（参加者1名）に対する、ソーシャルナイスティの獲得における写真付きの文字プロンプトの効果を検討した。研究4の参加者は文字を読んだ通りに反応することが難しかったが、結果として、写真付きの文字プロンプトを導入することによって、通常の写真プロンプトによって獲得することができなかったソーシャルナイスティの獲得に成功した。

第6章（研究5）では、資源効率的・時間効率的な介入を開発するために、パフォーマンスフィードバックと文字プロンプトの有効性を比較した。本研究では、参加した自閉症スペクトラム者全10名を、文字プロンプト適用群（5名）、パフォーマンスフィードバック適用群（5名）の2群に分けた。その結果、どちらの群も獲得に成功したが、文字プロンプト適用群よりもパフォーマンスフィードバック適用群がより早くソーシャルナイスティの獲得に至ることが示された。

第7章では、研究1から研究5までの結果について総合的に考察された。特に、パフォーマンスフィードバックの強化としての機能、文字プロンプトはルールとしての機能（ルール支配行動）している可能性について言及された。さらに、自閉症スペクトラム障害者に対してソーシャルナイスティを教える際には、3つの段階を用いて実践を行うことの示唆が述べられた。第一にパフォーマンスフィードバックのみを用いた介入、第二に文字プロンプトとパフォーマンスフィードバックを組み合わせた介入、第三に文字プロンプトとパフォーマンスフィードバックと行動的スキル訓練を組み合わせた介入を行うことで、対象者の状態に応じた介入を行うことができる可能性が示された。

2. 審査経過

(1) 研究目的と論文構成の整合性について

本研究では、自閉症スペクトラム障害者におけるソーシャルナイスティの獲得に向けた効果的かつ効率的な指導方法を明らかにすることを目的としている。職場を模したシミュレーション場面を活用し、その中で、実験変数としての行動的スキル訓練、及び文字プロンプトとパフォーマンスフィードバックの単独効果、組合せ効果、効果の比較検討を行っている。

研究1（第2章）では行動スキル訓練の効果の検討、研究2（第3章）では行動スキル訓練と文字プロンプトの効果の検討、研究3（第4章）では文字プロンプトとパフォーマンスフィードバックの組合せの効果の検討、研究4（第5章）では文字プロンプトのみでは獲得に至らない事例に対する写真付き文字プロンプトの効果の検討、研究5（第6章）では文字プロンプトとパフォーマンスフィードバックの効果比較の検討、といった論文構成となっている。実験変数を慎重に操作しその効果をシンプルに比較検討しており、かつ実践的価値を持つような事例研究による構成となっている。

以上のことから、研究目的と論文構成の整合性について、十分であると評価できる。

(2) 学位論文としての独創性と発展性について

本研究の独創性として、以下の3点を挙げることができる。

第1点は、指導のターゲットとした標的行動の選定にある。自閉症スペクトラム障害の中心的課題となるソーシャルスキル、その中でもソーシャルナイスティは、知的障害を伴わない自閉症スペクトラム障害者にとって就労を見据えた場合、その必要性和重要性は多くの研究が示唆しているものの、自閉症スペクトラム障害のある人にとって獲得しにくいスキル群であることは指摘されている。指導研究としてチャレンジしたことは高く評価できる。

第2点は、文字・文・写真などの視覚的なプロンプトによるルール支配行動としての行動遂行、及び行動遂行への強化としてのパフォーマンスフィードバックのように、行動分析学における理論的背景を活用し、かつ吟味した点は独創的であると言える。

第3点は、実用的な指導プログラムのためには、人的・準備等のコストが低く、また短時間での獲得が求められるが、実験変数の操作により、資源効率性と時間効率性に考慮することができている点である。

発展性としては、より実地的な課題へのチャレンジがある。まずは、今回の研究の限界でもあった、獲得したソーシャルナイスティの就労場面での遂行が促進されたり、その遂行により職場への定着が高まったりすることなどを実証しなければならない。また、今回提案された3階層の指導パッケージが実際に指導プログラムとして実施されるような普及が必要となり、このような側面からの発展性も求められる。

(3) 学校教育の実践への貢献について

自閉症スペクトラム障害のある高校生・大学生への就労支援の今日的意義は高く、特に教育段階では就労への準備性を高めることが求められる。自閉症スペクトラム障害のある高校生・大学生に対する就労に向けた準備的支援として、ソーシャルナイスティを含めたソーシャルスキルの指導プログラムを提供したことは非常に意義深いと評価できる。さらに、その具体として、自閉症スペクトラム障害者に対してソーシャルナイスティへのシミュレーション場面を用いた指導プログラムとして、3つの段階を設定している（3階層の指導パッケージ）。第一段階：パフォーマンスフィードバックのみを用いた介入、第二段階：文字プロンプトとパフォーマンスフィードバックを組み合わせた介入、第三段階：文字プロンプトとパフォーマンスフィードバックと行動的スキル訓練を組み合わせた介入、である。これらが教育実践として社会実装できていくことも期待される。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 山本真也 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。